

最上川から発信する暮らし再生の可能性—流域連携の新たな学びの促進へ—

ようやく春の訪れを感じさせる気候となった。山形県の最上川河畔に位置する清川に引っ越して2か月ほどが経った。これからヤツメウナギやサクラマスなど川漁が活発となり、農業もいよいよ1年の本格的な活動が始まり、にぎやかな季節を迎えようとしている。

筆者が海岸・平野部と内陸山間部の境にあるここ清川に引っ越したのは、理由がある。これまで筆者は内陸北部の山村、戸沢村角川地区に住んでいた。ここで里山の保全活動や山村の暮らしや生活文化について、住民の活動団体「角川里の自然環境学校」とともに学びながら地域づくり活動を進めてきた。またぎのおじちゃんや川漁師さんたち、中山間農家のおじさんやおばさんたちと共に行った地元を見つめ学びなおす「地元学」活動は大変楽しいものでもあり、また山間地域の暮らしを再生していくための基本となる哲学を考えさせるものでもあった。角川の暮らしに根ざした地域再生の取り組みは、今様々な場面で実を結びつつあり「何にもないムラ」と言っていた住民の間にも暮らしの誇りや地域づくりへの気持ちが醸成されようとしている。それは炭焼き活動の再生であったり、外部者との交流であったり、食産業の実験的取り組みのスタートであったり、多様な局面で住民独自の具体的な取り組みとして現れようとしている。

こうした状況の中で本紙面でもたびたび触れているように、角川という一地区にとどまらない波及効果が数年前から活発化するようになった。例えば、日本海に浮かぶ離島飛島と角川との海産物と炭など山村資源による物々交換経済による交流、酒田市中野俣と角川の里による協働の里山間伐による森づくり、金山町田茂沢と角川の里による地元学の研修学習会、舟形町長沢地区等と角川地区が受け入れ先となった大阪の修学旅行生の体験学習活動の実施など、連携活動は多岐にわたるようになっている。最近では連携の枠組みは角川の里と他の地域だけにとどまらない、他の地域相互間における独自交流も生まれようとしているのである。

筆者が所属する「NPO 法人里の自然文化共育研究所」（角川里の自然環境学校の研究セクションが独立して設立されたもの）では、このような状況を踏まえて山形県の内陸山間地域と西部海岸地域をつなぎながら、森里川海の資源を生かして地域の暮らしから学び元気にしていくためのプロジェクトを本格的に行っていくことになった。

ここで各地域を結ぶ共通のテーマとして浮上したのが「最上川」である。最上川から学ぶということは、単に最上川の自然生態系の現状を調査研究するというものではない。最上川流域の農山漁村の人々の暮らしと生活文化から学ぶということである。その後、県内の大学が連携して取り組む「大学コンソーシアムやまがた」では「最上川学教育プロジェクト」がスタートした。これは最上川流域の自然や文化をテーマにした教育プログラムの開発を主なミッションとするものである。この二つの流れが意味すること、それは最上川流域の人々が長年にわたって紡いできた暮らしの知恵や技術を、土地の古老から革新的に受け継ぎ、新たな形で現代に生かしていく術を模索する試みなのではないだろうか。水保

の地域再生の立役者である吉本哲郎氏は言う。「地元学は調べるために行うのではない。暮らしに役立てるために調べるのだ」。森里川海の恵みに隣接して暮らしてきた人々の地域再生の試みは、新たなパートナーと使命を帯びて今次の展開を迎えようとしているのである。